MATSUZAWA, Kōryū

Environmental Politics 6

（財）環境情報センター

MATSUZAWA, Kōryū

環境情報センター

Environmental Politics 6

（財）環境情報センター
疑問の二つはなぜ過去の寒冷化説が無視され現在温暖化に向かっているのか。その根拠についての十分な説明がないことである。

大変不幸なことに現在大学で学ぶ多くの学生は、かつて地球寒冷化説が流布されていたことを知られていないし、教えてもらえるものと信じています。

なぜこのようなことが起こるのだろうか。

それは現時点で教科書に立っている教師が地球温暖化のことを教える理由を教えていないからである。なぜなら、その種の説明は数多く書き、対応に通ってきた教師が講義をされているからだ。地球温暖化は起きているという説明を書いているのは教科書である。

小学校の新学校教育指導要領英語編においては、地球温暖化を触れ、「地球温暖化」とは「地球冷暖化」をかくのを忘れないことになる。

指導要領全体のトーンが、温暖化の如何に食い止めることなく、そのた

めにどのような立てて講じなくてもはならないかをしっかり児童に

教えよとの要領が変化しているのである。

ある私立の小学校では、社会の授業「国土の環境の保全」でこの

課題が生じている。「地球冷暖化」の日本での実情と日常生活でのような行動をとるべきかを

温暖化の問題を取り上げ、子どもたちに具体的な事例を通じて地球

温暖化の日本での実情と日常生活でのような行動をとるべきかを

指導展開している課題である。現在の全ての異常気象が温暖化のせい

であり、温暖化が無視できないのは人類の未来が危ぶまれるし、すべ

てが始まらないという意気込みを教科書として使用されているもの

はサンゴ礁を中心に、地球異変で重なるという不能を示している。

小学校の新学校教育指導要領英語編においては、地球温暖化を触れ、「地球温暖化」の状況について、過去の文献を十分検討さ

れてこなかったのではないと思われる。

さて、今から四年前の一九七〇年代後半に既に述べたよ

う、「地球冷暖化」の危機が叫ばれていた。もう少し正確に言うな

ら、「一九七〇年代から七〇年代にかけて地球が冷えていく状況が現わ

れてそれが動かすものとなっていのが七〇年代ということになる。

その時の「冷暖化」の説明を示すためにも少し詳しく再現して

おきたい。
原因として、人为的に地球環境を破壊するものも出てくる。太陽が一定の距离にある太陽から入ってくる短波放射に対しては通過で、すなわち、地球上の海洋や大陸から放出される微粒子（CO₂）が、どのようにしたかによって地球を通過さない。そのために、太陽の放射は（CO₂）があり、その下に積もる。これを温室効果と呼ぶ。

さて問題の箇所はここから先で、次のような説明が加えられている。

三八豪雪と飢餓

折りしもこの頃、例えば昭和三十二年（一九五六年）のいわゆるサンパ豪雪など、日本列島が凍りつく現象が現れ、以後毎年のように寒波の気象が相次ぎ、報じられていた。今から見れば想像できぬほどの積雪、それに伴う寒冷化は非常に困難であった。

しかし、戦後一九五〇年代は温暖化が指摘されているが、これは一九五〇年代の寒冷化の波が日本を襲ったことによる寒冷化である。今から八〇年代ほど前だと寒波の気象は相次ぎ、報じられていた。今から見れば想像できるほどの積雪、それに伴う寒冷化は非常に困難であった。

しかし、戦後一九五〇年代は温暖化が指摘されているが、これは一九五〇年代の寒冷化の波が日本を襲ったことによる寒冷化である。今から八〇年代ほど前だと寒波の気象は相次ぎ、報じられていた。今から見れば想像できるほどの積雪、それに伴う寒冷化は非常に困難であった。

しかし、戦後一九五〇年代は温暖化が指摘されているが、これは一九五〇年代の寒冷化の波が日本を襲ったことによる寒冷化である。今から八〇年代ほど前だと寒波の気象は相次ぎ、報じられていた。今から見れば想像できるほどの積雪、それに伴う寒冷化は非常に困難であった。
最近の温暖化説の根拠と疑問

（二）

最近の温暖化説の根拠と疑問

ところで最近の温暖化説が有力になる一方、新しい現象として、かつて寒冷化説があったという事実が再び指摘されるようになかなか難しくなってきたこともあり、この過去の寒冷化現象の事実を否定するのは難しく、うまくかわす議論が考えられるようになった。
環境政治 序説（6）

研究紀要

―明言できるのか。例えば、一九七〇年代に寒冷化の恐懼が叫ばれていたが、そこででは、いきなり１九七〇年代をいかに生き抜くかが叫ばれており、地球が破滅に向かっていることがその論点の中核に

とどまらず、襲う説明のように思える。それは、地球の気候変化に対する警戒心の高まりを示すもので、一九七〇年代の寒冷化の恐懼が、一九八〇年代の温暖化の恐懼に移ったと見ることができる。

温暖化と寒冷化の関係を考虑に入れると、温暖化は寒冷化の過程であり、寒冷化が予防されなければならない。温暖化を予防するためには、地球温暖化の原因を明らかにし、それに対する対策を講じることが必要である。

温暖化は、地球温暖化が予防されるためには、地球温暖化の原因を明らかにし、それに対する対策を講じることが必要である。地球温暖化の原因を明らかにし、それに対する対策を講じることが必要である。
一人為的地球温暖化論の典型的な筋書きは、産業革命を契機とし
て人間活動による二酸化炭素の大量排出が始まり、その温室効果に
よって地球の気温が不自然に上昇する。つまり、大気中の二酸化炭素
の増大は、産業革命端発の人为的活動によって開始されたとい
う現象は、具体的には、産業革命開始期、即ち五〇年代ごろから二
酸化炭素の増大と共に起こったという点で、一つの重要事実である。

このため、気候変動サイクルをしっかり学ぶことが必要であると言
うことができる。
環境政治
序説（6）

（三）地球温暖化

地球温暖化とは、過去数千年間の気候の変動を指す。特に、19世紀以降の気候変動が顕著となり、特に温暖化が著しい。

温暖化の原因は多岐にわたり、主なものは以下のようなものがある。

1. 工業革命以降、大量の炭素を燃焼させることで温室効果ガスが増加した。
2. 石油や石炭の使用が増加したことにより、エネルギー産業が発展した。
3. 化学肥料の使用が増加したことにより、地表の状態が変化した。
4. 城市の発展が私たちの生活に深刻な影響を及ぼしている。

これらの原因によって、地球温暖化が進行する。地球温暖化は、海平面上昇、極地の氷が溶け、作物の生産性が低下するなどの影響を及ぼす。

（四）地球温暖化の影響

地球温暖化により、気候が変化しており、特に温暖化の影響が顕著である。

1. 海平面上昇：海平面上昇により、多くの低地圏が浸水する可能性がある。
2. 気温上昇：気温が上昇すると、多くの生物が変化する可能性がある。
3. 水圧変動：水圧が変化すると、自然環境が変化する可能性がある。

これらの影響により、我々は地球温暖化の影響を認識し、対策を講じることが重要であり、特に国際的な協力が必要である。
二〇〇七年では、温帯化の問題が人为的温室効果ガスの増加によるものと、気候システムに温帯化が起こっていると断定した。しかし、これからの問題は、気温については、過去二〇〇年間の全期間平均気温が1.0度上昇、海面水位は二〇〇六年二〇〇五年に世界の平均気温が0.1度上昇、海面水位を打ち出した。この断定事項に対して、これまで地球が冷却化していると高説を述べてきた学者は現在目をくらんでいた。それでも、どれだけはなく、これまで寒帯化なとなかったかのようにこの説に迎合する状況とな

更にこの評価報告書が一〇〇年まで予測を次のよう截せた。

温帯化エネルギー源を重視し高い経済成長を実現する社会において、地球温暖化の影響、生態系の影響など深刻な被害の想定まで明確化したことが、世界が警戒の念を共有されるようとな

とで、全世界が余裕を持って追東来なかったので、当時のA新聞社の宣伝広告では、この温暖化を放置すると、海洋生物が減少し、世界が崩壊するなどの危機感を持って追いかけたものであった。そのA新聞社の中には、大学教授や中小企業家も多いたので、世紀末の映像が連日流されていたが、記憶力の人も多いたので、ないだろうか。

ところでもう一つの議論すなわち温暖化現象が人類の科学的発展や人間における環境破壊の影響から来るものか、人類の進歩的な汚染の結果もたらされるものの、他方、永河期とそれに続いた寒帯化は、それをな

かが十分蔓延していない時代、に温帯化の説明が一言もな

えが最近になって出てきた。これが、誰が怎么な問題であることは既に述べた。その中でも、特にどうして四〇〇年前（九〇九年）に十分な空気問題は、温帯化している。一方永河期に突入しているとの説明は、温帯化を正当化しようとする強い作法が感じられるよう、過去において温帯化を推進していたものが、今やかなさまのための後知恵だ、私たちは常に用心をすることにしている。

現在の地球は温帯化している。一方永河期に突入しているとの説明は、温帯化を正当化しようとする強い作法が感じられるよう、過去において温帯化を推進していたものが、今やかなさまのための後知恵だ、私たちは常に用心をすることにしている。
環境政治　序説　（6）

[研究記要]

まだ温暖化議論の中によう登場してくる「九世紀末から一〇〇年間を0.5度気温が上昇」の指摘も果たしてどのような方法で計測したものであろうか。例えば統計で言えば、一〇〇年までに地球の人口の予測は数式計算で導かれる可能性は考えられるが、気候の変化は常識的に見て不可能なこと。コンピューターによるシミュレーションの不確実性を確認するための手法が導入されない。しかしこのコンピューターによるシミュレーションは正確に把握できない。今後の科学的な進歩によってもそれは理解できない。

IPCC（国連の気候変動に関する政府間パネル）が一〇〇年までに地球の平均気温が1.5度上昇するという予測が果たして本当なのかどうか、かつ今世紀は寒冷化に向かっていると教えられた世代によってはそう簡単には信じられないのである。すでに述べたように、二〇〇七年に発表したIPCC第4期報告書の中で、ヒューマンの水河が二〇三五年までに消失するという記述が誤りであったとする声明を発表したことはありとも衝撃的であった。

IPCCのパラグラフ議長が「データの信頼性を十分にチェックする」といい、IPCCのパラグラフ議長が「データの信頼性を十分にチェックする」といった。
地球が冷える異常気象 旭屋出版 小松左京編集 一九七六年

四月

地球が冷える異常気象 旭屋出版 小松左京編集 一九七六年

三月

“水河期が来る水文社 根本順吉著 一九七六年”

二月

“水河期が来る水文社 根本順吉著 一九七六年”

一月

“水河期が来る水文社 根本順吉著 一九七六年”

過去の時代に、現在と同様に温暖な時期は確かになった。すべて期間の短いものであった。そして人間の干渉さえなければ、現在の温暖化も比較的早い時期に終わりを告げる可能性が高い。
""